

母の心

小川未明

青空文庫

この前の事変まえ じへんに、父親ちちおやは戦死せんしして、後はあと、母ははと子この二人ふたりで暮くらしていました。

良吉りようきちは、小学しょうがっこう校を終おわると、都みやこへ出でて働はたらいたのであります。ただ一人ひとり、故郷こきょうへ残のこしてきた母親ははおやのことを思おもうと、いつでも熱あつい涙なみだが、目頭めがしらにわくのでした。

「いまごろ、お母かあさんはどうなさっているだろう。」

仕事しごとをしていても、心こころで、ありありと、あのさびしい松並木まつなみきのつづく、田舎道いなかみちが見みえるのでした。橋はしを渡わたり、村むらからずっとはなれた、山やまのふもとに自分じぶんの家いえはあるのです。まれには、一日いちにちじゆう人ひとと顔かおを合あわさぬこともあります。急きゆうに母親ははおやが病氣びようきと

なつても、村へ知らせるものがないと思うと、良吉は、遠くにいても気が気でないのでした。

母親も、また、同じように子供を思っていたのです。身寄

のない旅へ出て、さだめし不自由をすることだろう。どうか達

者で働いてくれればいいがと、明け暮れ仏さまを拜んでいまし

た。それで、良吉は、自分が達者でいることを知らせるた

めに、毎日読んだ新聞を故郷へ送ることにしました。

「お母さん、手紙でなくても、新聞がいったら、私が無事でい

ると思つてください。」といつて、やりました。すると、その後

母親から、

「毎日、おまえから送つてくれる新聞を、ありがたく思つて

います。」と、喜んできました。親思いの良吉には、母

親の喜びが、なにより大きい自分の喜びだったので。

彼は、仕事を終わると、毎夜、新聞をポストへ入れにいきました。凍てつくように冴える星空をながめて、

「故郷は雪かもしれない。寒い晩だが、お母さんは、もうお休みになったかしらん。」と、思ったのでした。

良吉の出した新聞は、翌々日の朝、隔たった町の郵便局から、配達されました。いつも、それは、昼すこし前の、

時刻にきまつています。

母親は、戸口に立つて、「もう新聞のくる時分だ。」と、

あちらをながめていると、こちらへ急いでくる、配達人の姿が

見えます。わき見をせず、せつせとやってきます。

「郵便。」といつて、息子からきた新聞を手渡すとまた、せ

つせときた道を村の方へもどつていくのでした。その年ごろは、

ちようど良吉と同じくらいの少年でありました。

母親は、良吉が書いた上封の文字をじつとながめて、

すぐにそれを破ろうとはしませんでした。

「二日めで、はやこうして届く。遠いといつても便利の世の中じ

や。」と、母親は、まだ汽車のなかつたときのことを、考えて

いました。

秋の末ながら、お天気の日は、黄色くなつた田や、丘に、陽が

当たつて、なんとなくのどかな感じがしたが、みぞれが降り出す

と、少年の配達夫は頭から雨具をぬらして入ってきました。

「郵便屋さん、すこし休んで、お茶でも飲んでいってください

。」と、母親は、いいました。

「時間までに帰らなければなりませんから。」と、少年は、

新聞を置くと、急いで、いってしまったのです。

ある日、良吉のところへ、母親から手紙がまいりました。

「あ、お母さんからだ。」といつて、良吉は、押しいただいた

て封を開けてみました。

「寒くなつたが、変わりはありませんか。私も無事に日を送つて

いますから、安心してください。

おまえから、毎日新聞を送ってもらつてありがたいが、こ

のごろ、わたしめ私が目が変わるくなって、つづけて読よめないし、それに、
こちらは毎まいにち日みぞれや、雪ゆきまじりの風かぜがきびしく吹ふいています。
その中なかを、新聞しんぶん一つで、わざわざ遠とおくからきてくださる配はい達たつ
さんにお気きの毒どくですので、どうか、十日とおかめぐらいに一回かい送おくつてく
だされば結けつ構こうです。ただおまえの安あん否びがわかればいいので、こ
ののち後は、毎まいにち日送おくることは見み合あわせてください。」と、書かいてあ
りました。

「やさしいお母かあさんだ。それなら、十日とおかめぐらいに、絵えの雑ざつ誌しで
も送おくつてあげよう。」と、母ははおや親おやの気き持もちをよく知しっている良りよう
吉きちは、毎まいにち日新聞しんぶんを送おくることをよしたのでした。
毎まいにち日新聞しんぶんがこなくなつてから、母ははおや親おやは、なんとなく

さびしい気がしましたが、これで、少年配達夫が、いくらか
 助かるだろうと思つたと、また、うれしい気がしました。すると、
 しばらくめで、郵便を持ってきた少年が、
 「おばあさん、このごろ、どうして息子さんのところから、新
 聞がこないのですか。」と、ききました。母親は、笑いなが
 らありのままを話すと、

「そんなご心配なら、してくださらなくていいのです。」と、
 少年の目には、涙が光つたのでした。ほかの子供に対しても
 変わらざるやさしい母親の愛に感激したからです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

※表題は底本では、「母《はは》の心《こころ》」となつていま
す。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

母の心

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>